

## 江戸のにせ判じもん

昔、あったてんがな。

江戸ね、ごうぎ<sup>たいへん</sup>身上のよい大家があったと。

あるとき、その家の大掃除があつて、何時も出入りしているとつあも手伝いにいったと一日中、バタバタして終わって、家に戻って風呂に入っていたら、大事な品物しまうのを忘れてきてしもた。かかに、

「かか、かか、今日大家の家に掃除にいつて、流しの水船の中に、金の徳利入れたまんま、忘れてきてしもうた。いまごろ旦那の内じや、大騒ぎだろうが、いまさら、忘れたなんて言うのも具合が悪いしな」というているどこへ、大家の使いが来て、

「今日の大掃除にだいな金の徳利がどっかに行ったがお前知らんか」と聞くんだんが、

「おら、ずっ<sup>オコシモ</sup>でい、知らん」と答えた。使

いは「そんげのこというても、なんせ、すぐ来てみてくれ」といわしやつたと。とつあは、はておごつた。行つても困るし、行がん

でも困る。と申うていると、かかがこつそり

「いいことお前に聞かせてやる。これから大家に行つてソロバン一丁貸してゐて、珠をあつちへやったり、こつちへやったりして『その徳利は流しの方にある』とソロバンにかず<sup>せいに</sup>けて言うたらいいこて」とおせてくれた

んだんが、そろばんの珠をばちばち弾いて「金の徳利は流しの方にあると出た。流しのどこにあるかな。待て待て」とまたソロバンをパチパチして、「うん、わかった。流しの水船の中と出た」というんだんが、その通りにあつたと。みんながたまげたと。ほうして旦那様が褒美に錢をくれたと。

このとき、この家ね、大阪の鴻池という大金持の番頭が使いに来て泊まっていたと。このとつああの判じもんを見てたまげたと。

「さて、さて、お前さんのごうぎな判じもんにはおらもたまげてもうた。実は、大阪の鴻池のお嬢様が三年先から病気で、どの医者にかかつても治らん。ほとほと困つていとこだ。お前様ほどの判じ名人ならきつと治

ると思うが、判じてくださるようお願いします。すぐおらと一緒に大阪に来ていただきたい」とつあは、これまたおご<sup>たいへん</sup>とだねか、と思うたども、いやだともいわんね。

家に来て、かかにこの事を口説くとかかが、「何困ることがあろうば。大阪の鴻池というたら、誰知らぬものない大金持ちだ。お嬢さんの病気の判じもんが当たれば、お礼の錢だつてちつとやそつとでないことんし」とかかが威勢付けたんだんが、とつあもその気になった大阪へいぐことにした。

番頭と二人で大阪に向かった。その途中で、番頭の泊まり付けの旅籠や泊まった。ところが、その旅籠やは、大騒ぎだつたてんがな。

旅籠屋のかかに「ここんちは、何があつたんだい」と聞くと、「それが、よんべな、泊り客の金五十両をだれか盗んだもんがあつて、おやじはお上につれていがれたんだんが、心配で心配でまんまものどへ通らん」とかかがいうんだんが、番頭が

「そうかの。それは大変だ。この連れの人、江戸の判じもんの名人で、どっかへめえなく

なったもんなんか、そんな見つける人だ。この人から判じもんしてもらおうといい」というたど。とつあは、旅籠屋のかかに頼まれて、それくつき、今さらいやといわれん。こんやこっそり逃げ出そうと腹をきめたてんが。

「それでは見させてもらいます。どうか奥の間に一人で置いてください。おれが呼ぶまで誰も来ないように。それから、判じもんに使いたいんだが、ソロバン二丁と銭五両、焼き飯三つ、わらじに二足持ってきてくんねか」とすつかり逃げ支度して奥の間に入った。夜中に一人でこっそり逃げようと待っていた。ところが夜中になると、誰か、ミシン、ミシンと、しのび足で部屋に近づいてくるものがある。

「判じやさん、お願いにきましたが、起きてくんない」と呼ぶんだんが、起きて見たれば、若い女だった。

「判じ屋さん。お客の五十両を盗んだのは、おらでござんす。おらは、ここのおんなで近頃、親の病気が悪うなって死にそうだから、家へ帰ってこいと、親もとから手紙がくるが、

いくら主人に頼んでも家へやってくんない。

それで悪いとは承知して、お客の金をとって、家へ行くつもりだった。それが、こんげの騒ぎになって家へ行くこともならん。五十両は、去年の大風で、おいなり様の屋根が壊れて、そのまんまになっているが、その屋根に隠しておいた。それで、どうかお前様にお願いがあ。おらが金盗んだことはわかってるにきまつている。どうか、おらを助けると思いうて、おらを盗人にしないで貰いたい」と泣き泣き頼んだがんだと。「聞けば、気の毒な事情だすけね、お前の言う通りにしてやるが、よしよし、俺にまかしておけ。お前、家へ行きな、この五両と焼きめしとわらじをやる」と言うて、んな、おんなにくれた。

翌朝、旅籠屋のかかを奥に呼んで、そろばんをパチパチして、「この家には、おいなり様の堂があるな」「ハイ、左様で」「去年大風が吹いて、屋根がこわれたな」「ハイ、左様で」「そのぼつこれ屋根は、そのまんまにしてあるな」

「ハイ、左様で」「そのぼつこれ屋根に五十両が隠してある。屋根を直さんすけね、おいなり様がお客の五十両持って行かれたんだ。早

く屋根を直せ、というお告げだ」そこで、おいなり様へ行って見たれば、言う通りに、ぼつこれ屋根の所に、五十両がそっくりあった。ほうして、旅籠屋から、礼の金をいっばい貰うた。

それから旅をつづけて、大阪の鴻の池にいいよ着いた。番頭は、「このお方は、判じもんの名人で、お嬢さんの病気を見てもろうと思うて、江戸からお連れした」と、いろいろ話したれば、主人は、「それはありがたい。どうかお願いします。それにしても今夜はお疲れのことでございましょうから、静かな奥の部屋で、ゆっくり休んでいただきたい」ということで、奥の部屋に寝たが、これからの先きことを考えると、あじことしんぱいでで眠ることもならん。体は疲れているし、うつらうつらしていると、あの旅籠屋の、おいなり様が現われて、「先日は、汝のおかげで、ぼつこれ屋根が直されて、りっぱな堂様になって、まことにありがたかった。おかげで、急にお参りするもんが多うなり、あげもんも多くなった。ついてはそのお礼に、鴻の池の判じもんを聞か

してやる。病人の寝ているどこの、縁の下の泥を三尺掘ると、あみだ如来様の像が埋まっている。それを掘り出して、きれいな座敷に安置すれば、直ちに病気がなおる」と言うたかと思うと、もう姿がなかった。翌朝、鴻の池の旦那を呼んで、またそろばんをパチバチやっつて、いなりさまの言う通りのことをいうと、果してべとの中から、如来様が掘り出され、それを安置したら、たちまち病人は全快した。ほうして、とつつあは、米と金を山のように積んだ大八車と共に送られて、喜んで江戸へ帰った。かかも喜んで、一生安楽に暮した。これでいきがポーンとさけた。